



LOVE-ALCIA

Original Story アトリエかぐや
[TEAM HEARTBEAT]

Novelization 渡辺真澄

Original Illustration M & M

第1章 ほうきに乗って

5

第2章 お母さんのような人

31

第3章 幼い約束

63

第4章 水晶樹の夢

103

第5章 友達のキス、恋人のキス

145

第6章 ノブリス・オブリージュ
王族の責務

189

第1章 ほうきに乘って

ウィザーディア魔法学院の中庭は、魔女見習いの少女たちの熱気で、むせ返るようだった。
「う、うまくいかない」

「ええい、このっ！ ほうきのバカヤロ！ ぜんぜん浮かばないじゃないのっ」

「飛んでよ、お願いっ」

「アナトス、パキラ、風の精よ。私の望みを聞け。ほうきを空に飛ばせ、我と一緒に運びたまえ」

彼女らはそれぞれにほうきにまたがって呪文を唱え、空に飛ばそうとしているのだが、ちゃんとできているのはごく少数だ。

ほとんどはきまぐれな風の精を操ることができず、まったく空に浮かばないか、仮に浮かんでもほうきの動きに翻弄はんろうされて、すぐに落下するありさまだ。

彼女らのスカートが風になびき、白い下肢や太腿、あるいはショーツにつつまれた秘部さえのぞくが、さすが女子学院というべきか、彼女らは気にしていないように見える。

「おおい、戻ってきてくれよおっ」

トンボメガネにショートパンツの生徒が空に向かって叫んだ。学生の頭上をほうきだけが旋回せんかいしている。ほうきに逃げられてしまったのだ。

少女めいたかわいい容姿とほっそりした体形、第二次性徴前を思わせるメゾソプラノのせいで、女よりも女の子っぽく見えるが、この生徒の性別は男である。ツカサ・ストロビ

ラントウス、女子学院であるウィザーディアで、ただひとり入学を許可された少年だ。

ウィザーディア魔法学院は、魔法使いを養成するための女子学院だ。さまざまな国から魔法の資質にすぐれた女の子たちがやってくる。大陸に魔法学院はいくつかあるが、女子学院はここだけで、しかも大陸きつての名門である。卒業後は立派な魔女として、国の重鎮として活躍する生徒も多い。

少年であるツカサが特例として学院に迎え入れられたのにはわけがあった。

☆

「ほらほらっ！　ほうき乗りは集中力と慣れなのっ!!　風の精を守護精霊にしてる人はまだしも、そうじゃない子は努力あるのみっ！　落ちたぐらいでぎゃんぎゃん騒がないっ」

シルヴィア先生が櫓を飛ばした。豊満な身体を魔女服につつま、美しく輝く赤い髪を魔女帽で隠している。魔女はみかけで年齢をはかることが難しいが、女ざかりの妖艶な女性だ。身体の前で腕組みをして、ほうきと格闘する少女たちを見守っている。

その中から、黒髪の美少女がまたがっているほうきがスウツと空に飛びあがった。わあっ、と学生たちの間から称賛のため息が上がる。ほうきに乘って空を飛ぶ彼女の長い黒髪とハカマの裾が風になびく。

——あ、シズナだ。やっぱりなあ……。いちばんはシズナだと思つてた。

ツカサは掃除をしている最中のメイドさんのようにほうきをもちながら、空を飛ぶシズナを見つめた。

「おおっ。飛んでるっ。すごい。私が空を飛んでるんだっ！」

「シズナ、合格っ！ 帰ってよしっ!!」

シズナは、ゆつくりと中庭に降り立つと、シルヴィアに向かって鍛えられた仕草でおじぎをした。

「先生、ありがとうございます」

ポニーテールに結わえた黒髪が美しく流れ、キモノの袖がゆれる。片手にもつほうきが木刀のように見える。それもそのはず、彼女は剣士の家系に生まれた少女剣士なのである。

「みなには申し訳ないが、先に失礼させていただく」

シズナは同輩たちに軽く礼をして踵を返すと、学生宿舎に向かって歩いていく。
女の子たちがいっせいにざわついた。

「いいなあ」

「私も帰りたい」

「きやんっ、シズナ、ずるういゝ」

高い声を発して身体をねじったのはミルフィ・ファスファーだ。ショートボブの金髪と、

くると動く瞳が魅力的な、快活な少女である。

「飛べない子は居残りね」

絶妙のタイミングで先生が声をあげた。たちまちブーイングが起こる。

「ええ？ やだあっ!!」

「やだじゃないっ！ 立派な魔法使いになるためには、ほうき乗りは基礎の基礎よ。ほらががんばりなさいっ」

「ううう……は、早く乗れるようがんばらなきゃ……」

「そうね、早く部屋に帰ってお風呂に入りたくないもんね」

それまでも増して熱心にはうき乗りに取り組む生徒たちの中に、上品なものごとと繊細な美貌で、異彩を放つ少女がいた。

彼女がかぶっている羽根のついた特徴的な帽子といい、背を覆う豪華な金髪といい、どこか浮き世ばなれした美しさをもっている。

高貴さと上品さをオーラのように纏^{まと}う彼女の名前はアルシア・エルグラント。魔法王国エルグラントの第二王女だ。

プリンスがまたがるほうきがふわっと空に浮かんだ。

「あっ。飛びましたっ！ シルヴィア先生」

「いいなあ。アルシア、うまいわねえっ」

——すごい。アルシア……すごいなあ……。

空を仰ぐツカサの上を、アルシアの操縦するほうきはヨロヨロと飛んでいく。

「アルシア。ちょ、ちよつと怖いんだけど……」

「きゃっ。アルシア、あぶないわよっ」

「やめてっ。そんなに高く飛ばないで！」

「だいじょうぶですよー」

アルシアは、ほうき乗りに成功したことに興奮しているらしく、どんどん高度をあげていく。ほうきに乗ったお姫様の上半身はフラフラしていて、見るからにあぶなっかしい。

「アルシア、あんまり高く飛んじゃダメよっ。あなたは初心者なんだからっ！」

シルヴィアが叫ぶのと、お姫様の身体がぐらりとゆれ、地面に向かって落下するのは同時だった。

「きゃああああっ！」

「あぶないっ！」

「アルシアっ!!」

「だー、言わんこっちゃないっ」

女の子たちの悲鳴が交錯する中を、アルシアは長い髪をなびかせながら地面に向かって落下してくる。背中を下にして落ちてくる様子は、まるで大きな鳥のようだ。



シルヴィアが呪文を唱え印を結ぶが、とても間にあいそうにない。ツカサはアルシアを受け止めようとして彼女の落下位置に移動する。

ツカサの力では受け止められないかもしれないが、そのときはアルシアのクッション代わりになってやろうと考えたのだ。

「アルシアのバカヤロウ!! 面倒かけさせやがってっ!!」

空中でダミ声が響き、王女がかぶっていた帽子がひゅんと空を飛んだ。帽子は一瞬で羽根がついた丸い生き物へと変貌する。アルシアの背中に回りこみ、落ちるお姫様を助けようと懸命に力をこめる。

「失神してるんじゃないよ。学生とはいえ魔女の卵だろ? 起きて魔法でなんとかしろってんだっ! お姫^{ひめ}さんはこれだから困るんだよっ」

帽子型の生き物は、口を極めてアルシアをのしりながらも、彼女の身体をもちあげようと必死になっている。

「パキラ、ウルキア、アルシアの周囲の時を止めよ! ウルグス!!」

シルヴィアの呪文が響く。複雑に指を組みあわせ印を結んだ魔女の手から気合とともに光線が飛んだ。見事、結界魔法の発現に成功したものの、少しタイミングが遅かった。アルシアの落下速度は鈍っただけで完全には止まらない。

「アルシアッ!」

ツカサは叫びながら腕を広げた。アルシアの身体があわや地面に落ちるという時、ようやくのことでお姫様の身体を受け止めることに成功する。

「うわっ、わっわっわっ！ お、重、重い」

ツカサはふらついたあげく尻餅をついたが、帽子の生き物が必死に勢いを殺していたことと、シルヴィアの結界魔法の効果もあり、お姫様の身体にケガはなさそうだ。

中庭にそっと横たえる。アルシアは意識を失っているらしく、目を閉じてぐったりとしていた。

「よ、よかった……」

「はあああ。も、もう、ドキドキしちゃった」

学生たちが安堵の声をあげる中、ダミ声が響いた。

「だああつ。ツカサ、このポケット、踏んづけてんじゃねえよっ！ 足どけろ、足っ!!」

「あ、ジーク。ごめん。わざとじゃないんだ」

ツカサはあわてて足をあげた。足の形にへこんで地面に密着していたむによつとやわらかい物体は、瞬時に球形になり、今までの姿を取り戻した。そしてツカサの周囲をビュンビュンと飛び回る。

「わざとだったら犯してやるところだぜっ。ポケット！」

「僕はいちおう男だし、ジークには犯せないと思うんだけど」